広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「陽成院歌合（惜秋意）」における先行歌摂取
Author(s)	顧, 宇豪
Citation	表現技術研究 , 18 : 27 - 43
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53861
URL	https://doi.org/10.15027/53861
Right	
Relation	

「陽成院歌合（惜秋意）」における先行歌摂取

顧　宇豪

はじめに

「陽成院歌合（惜秋意）」（以下本歌合という）は、現存する二つの陽成院歌合の中で、「惜秋意」を歌題にした歌合である。本歌合は、成立時期が延喜十三年（九一三）九月九日と伝わり、『平安朝歌合大成』（以下略称『大成』）第一巻〔二四〕(1)に収録されて、陽成院が主催した私的で小規模な歌合だという推測がなされている。しかし、いまだ注釈書の類には収められないため、本歌合についての研究は乏しいのが現状である。

本歌合は二十三番、計四十六首の歌に構成され、勝負判定は十三の番に付しており、他の陽成院関係の歌合（「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院親王二人歌合」・「陽成院一宮姫君歌合」）と比べて圧倒的に多い。その内容を見ると、歌題「惜秋意」を主旨として、平易な歌と難解な歌が混在して並べられているが、共通の特徴として、『古今和歌集』を中心とする先行歌の表現が見受けられることがある。こうした特徴を、筆者は本歌合における先行歌摂取と考え、本稿において具体的に解説しようと思う。そして、本歌合のこの特徴から、本歌合の性格を瞥見したい。

一　明白な摂取歌が存在する場合

本歌合における先行歌摂取は、勿論、歌によって程度の不揃いがある。まず、特定の摂取歌を全体的に摂取したと考えられる歌の例から説明していく。

一・一六・二一・三一番歌は、

1 年毎にとまらぬ秋と知りながら惜しむ心の懲りずもあるかな
16 儚くて過ぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほあかぬかな
21 惜しめどもとまらぬ秋と知りながら惑ふ心はいかにせよとぞ
31 待てと言ひてとまらぬ秋と知りながら空ゆく月の惜しくもあるかな

とあり、これらの歌は、

● 寛平御時后宮歌合・三二
　まててふにとまらぬ物としりながらしひてぞをしき春のわかれを

を摂取歌にしたと考えられる。摂取歌は、『新編日本古典文学全集』（以

下略称『新全集』(2)によれば、「『待ってくれ』と言っても待ってくれないものだと百も承知してはいるのだが、春との別れというものはむやみと惜しいものである」と言っている。本歌合のこれらの歌は構造的には摂取歌と同じく、初・二句では季節が客観的に留まらない事実を述べ、第三句「知りながら」という逆接を設けて、下の句ではなお季節を惜しむと言っている。摂取歌では春だが、本歌合では秋に変換されている。さらに、摂取歌の初・二句の「まててふにとまらぬ物と」は、三一番歌の同句「待てと言ひてとまらぬ秋と」と酷似している。

一二・三七番歌は、

12目に見えで別るる秋を惜しめばや大空のみぞながめらるらむ

37大空の心ぞ惑ふ目に見えで別るる秋を惜しむ我が身は

とあり、これらの歌は、

● 躬恒集・四七

おほぞらをながめぞくらすふくかぜのこゑはすれどもめにもみえねば

を摂取歌にしたと考える。摂取歌は、『躬恒集注釈』(3)によれば、「大空をながめては物思いをして日を暮らすことだ。吹く風の音はするものの目には見えないように、あなたに逢えないものだから」と言っており、一二・三七番歌は、物思いする対象を、目に見えずに別れていく秋に置き換えている。大空を眺めるといった表現は、

● 古今和歌集・巻十四・恋歌四・七四三

さかゐのひとざね

おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

と、別れた恋人に対する未練を示す行為として詠まれており、一二・三七番歌では行く秋に対する未練となるであろう。

一七番歌は、

17いづこにか秋はいくらむ跡をだにとめてゆきせば尋ね見てまし

とあり、

● 寛平御時后宮歌合・三六

行く春の跡だにありと見ましかば野べのまにまにとめましものを

を摂取歌にしたと考えられる。一七番歌は摂取歌と同じく反実仮想を用いており、季節を春から秋に変換したのである。ただ、摂取歌は、『新全集』によれば、「去り行く春のせめて足跡なりとも見つけられるであろうならば、私は野辺をあちこちとさまよって、その足跡を捜し求めたであろうがなあ」と言っており、末句の「とめ」は「求む」であり、春の足跡を求めると言っている。一方、一七番歌の四句の「とめ」は「留む」であり、秋が足跡を残すと言っているので、摂取歌の「とめ」を字面だけで摂取したのであろう。

一九番歌は、

19慕ひてもとめまほしきを今はとて秋のゆくらむ方ぞ知られぬ

とあり、

● 千里集・七九

可憐春風老

をしみてもとめまほしきを春風の吹きすぎがたに成りぬと思へば

を摂取歌にしたであろう。ただ、摂取歌は、『千里集全釈』(4)によれば、「(行く春を)惜しんで引き止めたいものを。春風は吹き通りがたく(季節が移ると変わって)春風のまま吹きゆくのは難しくなると思うと」と言っており、二句の「とめ」は「留む」であり、春風を引き留めたいと言っている。一方、一九番歌の同句の「とめ」は「留む」と「求む」の両方とも取れる。

二三番歌は、

23草むらの虫と共にぞなきわたる暮れは死ぬべき秋の惜しさに

とあり、

● 是貞親王家歌合・三三

あきくれば むしとともにぞなかれぬるひとも草ばもかれぬと思へば

を摂取歌にしたと考える。二三番歌の二・三句は諸本において異同が見られ、底本の肥前島原松平文庫蔵本では「むし(虫)とゝもにそなきわたる」、書陵部蔵本・群書類従本・弘前図書館蔵本では「心しとゝもにそわたる」、島根大学蔵本では「むしとゝもにそわひわたる」とある。摂取歌を参考にすれば、二句は松平文庫本と島根大本の形であろう。書陵部蔵本・群書類従本・弘前図書館蔵本の本文は、「む」を「心」に誤写したのだと考えられる。そして、摂取歌の三句「なかれぬる」を踏まえれば、松平文庫本の「なきわたる」は虫の特徴を強調した優れた本文だと言えよう。

内容的には、摂取歌は「秋が来るので、虫と共に鳴き、声を上げて泣いてしまうことだ。あの人も草葉も、枯れて、離れてしまったと思うと」と言っており、惜秋の感情は二三番歌と共通するところがある。

一五番歌は、

15我が宿の菊の花しももみぢねば過ぎゆく秋もあらじとぞ思ふ

とあり、

● 古今和歌集・巻一・春歌上・一一

春のはじめのうた　　みぶのたゞみね

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

を摂取歌にしたと考えられる。摂取歌は、『新全集』によれば、「春がやっと来たと人々は言うけれど、鶯が鳴き声を聞かせないうちは、まだ春が来たのではあるまいと、私は思う」と、鶯が鳴かない限り春は来ていないと言っている。それに対して、一五番歌では自宅の菊が変色しない限り秋は過ぎ去ろうとしないだろうとアレンジした。

二六番歌は、

26紅葉葉の儚き風に散らざらば秋は過ぐとも知られざらまし

とあり、

● 寛平御時后宮歌合・三五／古今和歌集・巻一・春歌上・四六

梅がかを袖にうつしてとどめては春はすぐともかたみならまし

を摂取歌にしたと言えよう。摂取歌は、『新全集』によれば、「あたり一面に漂っている梅の香りを、袖に移していつまでも残せるものならば、たとえ春が過ぎ去ってしまおうとも、その思い出の種になってくれようものを」と、梅香を袖に移せば、春が過ぎても形見になれると言っている。そうした梅と春との関係を踏まえて、二六番歌は紅葉が散らなければ秋が過ぎても知ることができないと、紅葉は秋が過ぎ去った知らせだという紅葉と秋との関係について着想を得たであろう。

三九番歌は、

39身に添へてもたらぬ秋を惜しむとて暮れむ事こそわびしかりけれ

とあり、

● 古今和歌集・巻十九・雑体・一〇五八

（よみ人しらず）

人こふる事をおもにとになひもてあふごなきこそわびしかりけれ

を摂取歌にしたと想定できる。摂取歌は、『新全集』によれば、「あの人を恋い慕うのは重荷を背負っているようだが、逢う期がなくて苦しいことは、朸（天秤棒）がなくてその重荷が持てないようなものだ」と言っており、三九番歌の初・二句「身に添へてもたらぬ」は、摂取歌の「おもにとになひもて」を意識した表現であろう。

四一番歌は、

41今はとて過ぎゆく秋の形見には風の送れる紅葉をや見む

とあり、

● 古今和歌集・巻十四・恋歌四・七三七

近院の右のおほいまうちぎみ

今はとてかへす事のはひろひおきておのがものからかたみとや見む

を摂取歌にしたと考えられる。摂取歌は、『新全集』によれば、「『もうこれまでです』と言って、私の手紙をお返しくださったが、ありがたく頂戴しましょう。それはもともと私が書いたものではありますが、あなたとの愛の記念と思いましょう」と言っており、恋文を恋人の形見に見立てる。それに対して、四一番歌は紅葉を秋の形見に見なすという風にアレンジした。特に第四句「風の送れる」という表現は、摂取歌の「かへす事のは」という手紙の要素を意識したものであろう。

四二番歌は、

42秋ながら年は暮れなむ紅葉葉を幣と散らせる山の峰より

とあり、

● 寛平御時后宮歌合・二三

春ながら年はくれなん散る花ををしと鳴くなる鶯のこゑ

を摂取歌にしたであろう。摂取歌は、『新全集』によれば「春のままでこの一年が終わってもらいたい。花の散るのを惜しんで、あのように鳴く鶯の声が聞こえるよ」と言っている。初・二句では、摂取歌は春のままに一年が終わってほしいと言っており、それに対して四二番歌は秋のままに年が終わってほしいと惜秋の主題に合わせてアレンジした。

二　特徴的な表現を摂取した場合

次に、摂取歌を全体的に摂取していないが、その一部の特徴的な表現を摂取したと考えられる歌の例を説明していく。

二・一三番歌、

2をしと言ひて海へも誘へ飛び渡るいづれか秋の渡りなるらむ

13惜しと思ふ心ぞ深き天の川流れて秋のとまりなるらむ

とあり、それらの下の句には「秋の渡りなるらむ」・「秋のとまりなるらむ」という類似表現が見られ、それは、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・三一一

秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる　つらゆき

年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ

の下の句の「秋のとまりなるらむ」を摂取したのであろう。摂取歌は、『新全集』によれば、「毎年毎年、きれいな紅葉を浮かべ流す龍田川ではあるが、その紅葉が最後に流れつく河口――それがまた秋の停泊港ということだろうよ」と言っており、「秋のとまり」は「秋の停泊港」という水と深い関係を持つ表現となっている。二番歌には「海」、一三番歌には「天の川」があるので、下の句の「秋のとまり」・「秋のわたり」はやはり同じく水と関わりのある表現となっているであろう。

三・三八番歌は

3あだなりと人や見るらむ年毎にとまらぬ秋を惜しむ心を

38とどむれどとまらぬ秋を惜しむとて心にはかる名をや立ちなむ

とあり、三番歌の三・四・五句「年毎にとまらぬ秋を惜しむ心を」と三八番歌の上の句「とどむれどとまらぬ秋を惜しむとて」は近い表現であり、内容的にはほぼ一番歌を簡略化したものに見える。こうした一番歌のような懲りない惜秋の心について、三番歌は「人や見るらむ」、三八番歌は「名をや立ちなむ」と、他人という客観的な視点を用いている。三番歌の「あだなりと」の用例は、

● 亭子院女郎花合・一八

あだなりとなにぞたちぬるをみなへしなぞあきののにおひそめにけむ

● 古今和歌集・巻二・春歌下・六二／伊勢物語・一七段

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人のきたりける時によみける　よみ人しらず

あだなりとなにこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

と多く見られ、当時では常套的な表現だが、三番歌では無駄という意味を取っている。三八番歌の「心にはかる」は、当該歌にのみ見られる表現で難解であるが、

● 古今和歌集・巻二・春歌下・一三二／左兵衛佐定文歌合・六

やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける女どもを見てよめる　みつね

とどむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふこころか

◆ 『新全集』による解釈

三月の末の日に、花摘みから帰ってきた女房たちを見て詠んだ歌

花は枝にとどめられない、同様に彼女らを引きとどめられはしない。それなのに、花といい女性といい、すべてのむなしく去りゆく美しいものに、連れ添いたいとは、何というむなしい私の心なのであろう。

を参考にすれば、何らかの誤写が存在し、本来「心が儚い」のような意味の本文だったと推測する。その校訂についてこれから検討したい。

因みに、三八番歌の「名をや立ちなむ」の用例は、

● 寛平御時后宮歌合・八八／古今和歌集・巻四・秋歌上・二二九

小野美材

をみなへし匂へる野辺にやどりせばあやなくあだの名をやたちなん

● 伊勢集・三〇

またかくきこえたてまつれる

人もきぬをばながそでもまねかればいとどあだなるなをやたちなむ

● 後撰和歌集・巻二・春中・七八

わすれ侍りにける人の家に花をこふとて

かねみのおほきみ

年をへて花のたよりに事とはばいとどあだなる名をや立ちなん

と、「あだ」との組み合わせが多く見られるため、三番歌の初句とも関連性があるかもしれない。

八番歌は、

8声立てて鳴く鹿計惜しめども過ぎゆく秋はとまらざりけり

とあり、鹿は秋歌によく見られる題材で、本歌合においては他に三首が詠まれており、対となる七番歌、

7神南備の森によを経てなく鹿は過ぎゆく秋を惜しみとめなむ

も鹿を詠んでいるが、八番歌は特に鹿の鳴き声に注目しており、その初句の「声立てて」は、

● 寛平御時后宮歌合・一一六

あき山に恋する鹿の声たてて鳴きぞしぬべき君がこぬよは

● 友則集・一八

（左三うた、こひあり寛平御時殿上人歌合せしにかはりて）

こゑたててなきぞしぬべきあきぎりにともまどはせるしかにはあらねど

から摂取したのではないだろうか。

因みに、上記の摂取歌には「なきぞしぬべき」という表現があり、その「し」はサ変動詞の「す」だが、二三番歌、

23草むらの虫と共にぞなきわたる暮れは死ぬべき秋の惜しさに

では「死ぬべき」として捉えられており、それも摂取歌の表現を誤解したのであろう。

五番歌は、

5長月は来し日よりこそ惜しまるれ今は限りの秋と思へば

とあり、

その二句「来し日よりこそ」は、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・二五六

いしやまにまうでける時、おとは山のもみぢを見てよめる

つらゆき

秋風のふきにし日よりおとは山峰のこずゑも色づきにけり

から摂取したと考える。また、摂取歌の三・四・五句「おとは山峰のこずゑも色づきにけり」は三三番歌、

33暮れぬべき秋を惜しめば小倉山峰の紅葉も色付きにけり

の同句「小倉山峰の紅葉も色付きにけり」と酷似しているので、三三番歌もこの歌を踏まえていると想定できる。

そして、五番歌の「今は限り」は、

● 寛平御時后宮歌合・九六・一三九／古今和歌集・巻五・秋歌下・二六四

ちらねどもかねてぞをしき紅葉ばは今はかぎりの色とみつれば

から摂取したと考え、二七番歌、

27とどむれど今は限りとゆく秋をわりなく惜しと思ほゆるかな

にも詠まれている。そのため、二七・三三番歌は、創作の過程に五番歌と関連していた。

六番歌は、

6訪ふ人もなきもの故にあぢきなく言はむ間もなく惜しき秋かな

とあり、初・二句の「訪ふ人もなき」は、

● 寛平御時后宮歌合・一三五

草も木も枯行く冬の宿なれば雪ならずしてとふ人ぞなき

● 古今和歌集・巻四・秋歌上・二〇五

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

● 同上・巻五・秋歌下・二八七

あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

とあるように、当時ではよく詠まれた表現であり、自分を訪ねてくる人がないという寂寞の情景を表す。

二〇・三二番歌は、

20紅葉葉を錦と見ゆる秋なればたつを惜しとや鹿の鳴くらむ

32深山なる紅葉の錦色に出でて惜しむに秋のたたば憂からむ

と紅葉を錦に喩えて詠んでおり、その比喩は当時では常套的だと言える。ただ、「たつ」という表現は、秋の旅立ちと錦を断ち切ることを掛けているが、秋に「たつ」が付くのは、

● 古今和歌集・巻四・秋歌上・一七〇

秋たつ日、うへのをのこどもかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる

つらゆき

河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ

を参考にすれば、一般的に秋の到来を意味するので、本歌合では立ち去るという特殊な意味を取っていると考える。また、錦を断ち切ることは、先行歌で詠まれた例がなく、強いて言えば、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・二九六

ただみね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

と、秋が過ぎると紅葉が散って、詠み手が錦を裁ち着る気持ちになる

という用例が見られ、本歌合は、その歌の「たちきる」を「断ち切る」として捉えて摂取したのだろうか。

三六番歌は、

36千草なる心のままにおのがじし別るる秋を惜しみつるかな

とあるが、初・二句(5)は諸本において異同が見られる。初句は、松平文庫本では「ちくさ」、書陵部本・群書類従本・島根大本では「ちらす」、弘前図書館本では「ちらさ」となっており、意味的には松平文庫本の「ちくさ」のみが通じ、その用例は、

● 古今和歌集・巻十二・恋歌二・五八三

題しらず　　つらゆき

秋ののにみだれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな

● 寛平御時后宮歌合・一〇九

秋の露色のことごとおけばこそ山も紅葉も千くさなるらめ

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・二五九

題しらず　　よみ人しらず

あきのつゆいろいろごとにおけばこそ山のこのはのちくさなるらめ

とあり、花・紅葉の色が様々だということを言っている。また、第三句「おのがじし」も、

● 貫之集・三〇八

冬

おく霜の心やわける菊花うつろふ色のおのがじしなる

と、変色した菊の色が様々だと詠む例が存在する。三六番歌は「ちくさ」と「おのがじし」という二つの表現を取り入れて、惜秋の心が様々だと言いたいのであろう。

三　漢詩文からの摂取

黄一丁氏(6)の先行研究では、本歌合における「惜しめどもとまらぬ秋」・「はかなくてすぐる秋」・「別るる秋」という三つの表現は漢詩文、特に白居易詩の表現を摂取したと述べられているので、本歌合における漢詩文の摂取という問題についても検討したい。

まず、「惜しめどもとまらぬ秋」は、本歌合において、

1年毎にとまらぬ秋と知りながら惜しむ心の懲りずもあるかな
3あだなりと人や見るらむ年毎にとまらぬ秋を惜しむ心を
7神南備の森によを経てなく鹿は過ぎゆく秋を惜しみとめなむ
8声立てて鳴く鹿計惜しめども過ぎゆく秋はとまらざりけり
10惜しめども秋はとまらず竜田山紅葉を幣と空に手向けむ
18大方の秋は惜しめどかひもなし名の長月をとどめてしがな
21惜しめどもとまらぬ秋と知りながら惑ふ心はいかにせよとぞ
27とどむれど今は限りとゆく秋をわりなく惜しと思ほゆるかな
30いづ方に心をやらむあかずして過ぎゆく秋を惜しみとどめで
31待てと言ひてとまらぬ秋と知りながら空ゆく月の惜しくもあるかな
34惜しめども秋はとまらず女郎花野辺に遅れて枯れぬばかりを
38とどむれどとまらぬ秋を惜しむとて心にはかる名をや立ちな

む

39身に添へてもたらぬ秋を惜しむとて暮れむ事こそわびしかりけれ

43惜しめどもとまらぬ秋は常盤山紅葉果てぬと見ても許さじ

44年毎にとまらぬ秋と思ひなば手脆き人の惜しまざらまし

46惜しむにもとまらぬ秋の立ち出でば恨みをのみや思ひでにせむ

と十六首に詠まれており、本歌合歌の他書所伝（末尾の括弧数字は本歌合における歌番号）でも、

● 続古今和歌集・巻五・秋歌下・五三四/五三七

延喜十三年陽成院歌合歌　　よみ人しらず

をしめども秋はとまらぬたつたやまもみぢをぬさとそらにたむけて（10）

● 万代和歌集・巻五・秋歌下・一二五四・一二五五

陽成院御時歌合に、惜秋意といふことを　　読人しらず

とふひともなきものゆゑにあぢきなくいはむかたなくをしきあきかな（6）

としごとにとまらぬあきとしりながらをしむ心のこりずもあるかな（1）

● 新拾遺和歌集・巻五・秋歌下・五五〇

陽成院御時歌合に　　読人しらず

年ごとにとまらぬ秋としりながら惜むこころのこりずもあるかな（1）

● 夫木和歌抄・巻十二・秋部三・四七四七

延喜十三年九月陽成院歌合、惜秋意　　読人不知

かみなびのもりによをへてなくしかは過行くあきををしみとめなん（7）

と、基本的に「惜しめどもとまらぬ秋」という表現を含む歌が収録されているので、本歌合の代表的表現と言える。金子彦二郎氏・小野泰央氏の先行研究(7)によると、「惜しめどもとまらぬ」といった表現が見られる歌が白居易詩、

留春留不住（『白氏文集』(8)巻五一　「落花」）

惆悵春帰留不得（同上・巻一三　「三月三十日題報恩寺」）

留春不住登城望（同上・巻五四　「城上夜宴」）

における惜春表現を摂取したと述べ、また、北山円正氏・小野泰央氏の先行研究(9)によれば、日本漢詩の表現、

惜秋秋不駐（『菅家文草』(10)巻五　三八一「暮秋、賦秋尽翫菊、応令。并序」）

秋輝難駐（『本朝文粋』(11)巻十二　三五四「老閑行」）

が前記の白居易詩の表現に学んだと指摘している。これらの先行研究を踏まえて、黄氏は、本歌合の「惜しめどもとまらぬ秋」という表現が道真詩の影響を受けたものだと推測している。しかし、「惜しめどもとまらぬ」という表現は、同時代では、

● 古今集・巻二・春歌下・一三〇

はるををしみてよめる　　もとかた

をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへば

● 躬恒集・九〇

（春）

をしめどもとどまらなくにさくらばなゆきとのみこそふりてやみぬれ

● 亭子院歌合・三六　　貫之

をしめどもたちもとまらずゆくはるをなこしのやまのせきもとめなむ

● 貫之集・二二三

春のくれ

いつとなくさくらさけとかをしめどもとまらで春の空にゆくらん

● 同上・五二六

（同じ年四月のないしの屏風のうた十二首）

をしめどもとまらぬけふは世間にほかに春まつ心やあるらん

と、既に惜春の歌では多く詠まれており、これらの惜春の歌は白居易詩などの漢詩文の影響を直接に受けたかもしれないが、本歌合が漢詩文から直接に摂取したとは言い難いであろう。また、道真詩に関して言えば、白居易詩を直接参考にしたことが通説となっており、本歌合の詠者が道真詩を知っていた可能性も否めないが、先行の和歌に対する意識の方が強いであろう。

次に「はかなくてすぐる秋」は、一六番歌、

16 儚くて過ぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほあかぬかな

に詠まれており、黄氏は、一六番歌を「虚しく過ぎる秋だとは知っているものの、秋を惜しむ心は、やはり満足するということはないのだ」と解釈し、「はかなくてすぐる秋」という表現が漢詩文、

独倚破廉閑悵望、可憐虚度好春朝。（『元氏長慶集』(12)　巻二一「酬樂天三日見寄）

也應自有尋春日、虚度而今正少年。（同　巻一六　「羨酔」）

虚度東川好時節、酒楼元被蜀児眠。（同　巻一七　「使東川・好時節」）

徒有名録、空度歳時。（『隋書』(13)　巻二一　帝記第二）

痛飲狂歌空度日、飛揚拔扈為誰雄。（『全唐詩』(14)　巻二二四　「贈李白」）

における「虚度」「空度」から影響を受けたのだと指摘している。

しかし、同時代において「はかなくて」と「すぐ」の組み合わせの用例は、

● 躬恒集・一六一／左兵衛佐定文歌合・四

仲春　持

はかなくて春ひと月はすぎにけり花のさかりはすぎがてにせよ

と、惜春の歌となっている。また、「はかなくて」という表現を詠んだ歌は、

● 千里集・九

夜風吹送毎年春

はかなくて空なる風の年をへて春ふきおくることぞあやしき

● 同上・六六

年年只是人空老

としどしとかぞへこしまにはかなくて人はおいぬるものにぞありける

● 古今和歌集・巻十二・恋歌二・五七五

（題しらず）　　そせい法し

はかなくて夢にも人を見つる夜は朝のとこぞおきうかりける

● 躬恒集・四六九

（屏風のうた）

あきのよのながゐをやせむはかなくてもみぢの川にひをくらしつつ

● 後撰和歌集・巻二十・哀傷歌・一三八九/一三九〇

先帝おはしまさで、世中思ひなげきてつかはしける　　三条右大臣

はかなくて世にふるよりは山しなの宮の草木とならましものを

● 元良親王集・一三五

つきのあかき夜おはしたるに、いでてものなどきこえて、とくいりにければ、みや

よなよなにいつとみしかどはかなくていりにし月といひてやみなん

と、主に満足できない、あっけないという意味で詠まれるので、黄氏のように「虚しく」と解釈するのは適切ではないと言わざるを得ない。また、黄氏は一六番歌について「紅葉などの素晴らしい美景を満喫できず、本来はもっと大事に過ごすべき季節を無駄に過ごしてしまった」と解説しているが、当該歌は秋があっけなくすぐに過ぎ去ってしまうことを知りながら、敢えて秋を惜しむという惜秋の歌の心を積極的に強調しているので、黄氏が言う秋を無駄に過ごしたという後悔のような消極的な感情とは違うのではないかと思う。それに、「はかなし」を「虚し」と解釈すれば、二六番歌、

26紅葉葉の儚き風に散らざらば秋は過ぐとも知られざらまし

の「儚き風」は「虚しい風」という意味不明な解釈となるであろう。

そもそも、一六番歌の「はかなくてすぐる秋」という表現の主体は秋であり、その秋は詠み手にとっては客観的にあっけなく過ぎる季節だと言っている。一方、「虚度」「空度」といった漢詩文の表現は、黄氏によれば、

ここで注意を払うべきなのは、「虚度」の下に「春朝」、「少年」、「好時節」などの貴重な時間を表す語が存在し、「空度」の下にも「歳時」、「日」などの美景及び時間を表す語が存在することである。則ち、「虚度」又は「空度」という表現からは、本来は大事に過ごすべき時間を無駄に過ごしてしまったという無念さが読み取れる。

と、作者が時間を無駄に過ごしたことを主観的に認識しているという。しかし、「痛飲狂歌空度日」といった酒を痛飲し歌を歌い狂うような放蕩な生活は、出仕せず自堕落な状況を言っているので、古代中国の儒教的な社会価値観を内包していると考えられる。それを踏まえれば、漢詩文における「虚度」「空度」は、果たして、黄氏が「このような感覚は、正に前掲の和歌から読み取れる、春秋を無駄に過ごしてしまったという感情と共通する」と述べるように、季節の移り変わりを指す「はかなくてすぐる」と共通すると認定できるだろうか。

そして、「別るる」は、

12目に見えで別るる秋を惜しめども大空のみぞながめらるらむ

36千草なる心のままにをのかじし別るる秋を惜しみつるかな

37大空の心ぞ惑ふ目に見えで別るる秋を惜しむ我が身は

の三首に詠まれており、黄氏は、白居易詩及び元稹詩の、

醉心忘老易、醒眼別春難。（『白氏文集』巻六六　「晩春酒醒尋夢得」）

今日送春心、心如別親故。（同上　巻一〇　「送春」）

一為池中物、永別江南春。（同上　巻六二　「感白蓮花」）

三月尽時頭白日、與春老別更依依。（同上　巻五三　「柳絮」）

葵枯猶向日、蓬断即辞春。（同上　巻一七　「江南満居十韻」）

一辞渭北故園春、再把江南新歳酒。（同上　巻五三　「蘇州李中丞以元日郡斎感懐詩寄微之及予輙依来篇七言八韻　走筆奉答兼呈微之」）

城西三月三十日、別友辞春両恨多。（『全唐詩』巻八八三　「城西別元九」）

曽携酒伴無端宿、自入朝行便別春。（『元氏長慶集』巻二二　「再酬復言和前篇」）

における「別春」「辞春」の影響を受けたと指摘し、また、漢詩文における「別春」「辞春」といった表現について、

白居易詩及び元稹詩では、「春が去って行く」ことを、「別春」或いは「辞春」と称する。「感白蓮花」では、春と別れる主体は蓮である。それ以外の作品では、春と別れる主体は全て詩人自身である。このような発想は、前掲の和歌に見られる「別かるる春」(15)・「春の別れ」という発想と一致する。

と述べているが、「感白蓮花」の蓮の花も、「江南謫居十韻」の蓮も、作者が自身の高潔さを示す比喩だと考えられるので、「別春」「辞春」は全て作者が主観的に春を過ごしたと言っているのであろう。まして、「柳絮」の「三月尽時頭白日、與春老別更依依。」というのは歎老の詩なので、ここの「春」は単なる季節ではなく、作者自身の青春を指しているとも考えられ、季節が秋に置き換えられるかどうかも問題である。また、「別るる」は、

● 古今和歌集・巻四・秋歌上・一八二

なぬかの夜のあかつきによめる　　源むねゆきの朝臣

今はとてわかるる時は天河わたらぬさきにそでぞひちぬる

● 同上・巻八・離別歌・三七四

あふさかにて人をわかれける時によめる　　なにはのよろづを

相坂の関しまさしき物ならばあかずわかるるきみをとどめよ

● 同上・巻八・離別歌・三九六

仁和のみかどみこにおはしましける時に、ふるのたき御覧じにおはしましてかへりたまひけるによめる　　兼芸法し

あかずしてわかるる涙滝にそふ水まさるとやしもは見るらむ

● 同上・巻八・離別歌・四〇〇

（題しらず）

あかずしてわかるる袖のしらたまをきみがかたみとつゝみてぞゆく

● 同上・巻十二・恋歌二・六〇一

（題しらず）　　たゞみね

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

● 同上・巻十六・哀傷歌・八五八

おとこの人のくににまかれりけるまに、女にはかにやまひをしていとよはくなりにける時、よみをきて身まかりにける

よみ人しらず

こゑをだにきかでわかるるたまよりもなきとこにねん君ぞかなしき

と、人が自発的に離れていくことを意味しており、それを秋の移り変わりに喩えているので、「別春」「辞春」のように作者を主体として「春」と別れることとは齟齬がある。

以上のように、黄氏が本歌合における漢詩文からの摂取を指摘したことについては、改めて検討した結果、本歌合は直接に漢詩文から摂取したわけではなく、あくまでも既有の漢詩文を参考にした日本の文学作品から、間接的に漢詩文的な表現を摂取したと考えられる。全体的にいえば、本歌合は先行の和歌に対する意識が圧倒的に強いのであって、漢詩文に対する意識にそこまで拘泥する必要はないであろうと思う。

おわりに

本稿は先行歌摂取という視点を用いて、陽成院歌合（惜秋意）の表現を分析したものである。分析を整理した結果は、以下のようになる。

まず、明白な摂取歌がある歌と特徴的な表現を摂取した歌の例を見れば、本歌合が『古今和歌集』及びその周辺の歌合から受けた影響が絶大である。本歌合その他の歌も、『古今和歌集』周辺の歌の常套的な表現を取り入れている。

先行歌に対する摂取は、他の陽成院関係の歌合にも見られる現象で、例えば、「陽成院歌合（夏虫恋）」(16) の冒頭、

1 いたづらに身はなるてへど夏虫の思ひはえこそ離れざりけれ
2 身を捨てて一つ思ひに焦がれたる心ぞ夏の虫にまされる

は、明らかに『古今和歌集』・巻十一・恋一・五四四、

（題しらず　よみびとしらず）
夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

を摂取歌にしている。また「陽成院一宮姫君歌合」(17) は、

本　坂上是則
15 佐保山のはその色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな
左勝
16 佐保山の峰の紅葉葉色々に立つ朝霧ぞ空にしるらむ
右
17 薄き濃き色の限りぞ佐保山は秋果つるまで浅きとな見そ

と、古歌に返歌する形になっている。

こうした先行歌を踏まえて歌を詠むことは、『古今和歌集』に、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・二一〇

寛平御時ふるきうたたてまつれとおほせられければ、たつた河もみぢばながるといふ歌をかきて、そのおなじ心をよめりける　おきかぜ

み山よりおちくる水の色見てぞ秋は限と思ひしりぬる

と、同集に収録されている、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・二八四

（題しらず　　よみ人しらず）

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又は、あすかがはもみぢばながる

という古歌を承けて詠んでいる例も見られるが、『古今和歌集』・三一〇は古歌の表現よりも、その季節感をほのめかす内容を重視している。一方、本歌合は、先行の歌の表現を露骨に取り入れているため、『古今和歌集』・三一〇と比べて、作品のオリジナリティが欠乏しており、文学としての価値が一段に劣っていると言わざるを得ない。

まして、摂取した表現は先行歌とは異なる意味で用いられるケースがある。例えば、三番歌の「あだなり」は、先行歌では「浮気だ」という意味になっているが、当該歌では「無駄だ」という意味を用いている。二三番歌の「死ぬべき」は、先行歌における「なきぞしぬべき」のサ変動詞「し」と完了の助動詞「ぬ」が、動詞「死ぬ」という形に転用されたのだと考える。二〇・三二番歌の「たつ」は、「秋立つ」が先行歌では秋の始まりを意味するが、これらの歌では「秋が旅立つ」というニュアンスとなり、「錦たつ」が先行歌では錦を裁縫して着物として着ることを意味するが、これらの歌では「錦を断ち切る」として用いられている。以上の現象は、詠者が先行歌の表現を字面で摂取して、誤解を生じた結果であろう。そこから、本歌合の詠者は和歌の素養がやや欠如している素人であることが想定できよう。

従って、本歌合の歌合としての性格は、先行歌の表現を積極的に摂取していることから、習作的な歌合だと考えられる。この性格は、「陽成院一宮姫君歌合」も持っているとすでに拙稿(18)で論じた。こうした習作的な歌合は、主流歌壇の歌合と比べて、さすがに遜色があると考え、私的な歌合だという『大成』の論は間違いない。

さらに、本歌合は、一・一六・二一・三一番歌のグループのように表現が雷同する歌が多く存在するので、全体的な見栄えのために、敢えて歌をシャッフルしたと推測する。そうすれば、左右方の勝負について、本歌合はそこまで重視していなかったかもしれない。同年の三月十三日に開催された「亭子院歌合」は、華々しい晴儀の歌合で、宇多院の御判も付けており、後の天徳四年内裏歌合の原型とも考えられる。革新的な「亭子院歌合」と比べて、本歌合はその陰に隠れるぐらい地味であろう。ただ、本歌合は、当時の和歌の学習と創作などの実践的な面を表す標本として価値があり、後世の先行歌摂取ないし新古今時代の本歌取りに影響を与えた可能性があろう。

なお、本歌合からは陽成院一門の有様も窺える。本歌合の成立当時、陽成院は四十六歳で、十七歳にして退位してから三十年ぐらい経っていた。『古今和歌集』が成立したかどうかも微妙な時期に、陽成院は本歌合を主催し、何らかの思いを和歌に託したと推測できよう。そこには異例の廃帝としての失意や無念、そして現政権に対する嫉妬と怨恨などの負の感情や個人のプライドが勿論交えられていると考えられるが、陽成院は老人ともされる歳で、素人として和歌に関心を示していることから、陽成院の積極的な人生態度とチャレンジ精神も垣間見える。

また、先行歌の大量摂取から、陽成院一門が先行歌の資料を相当所持していたことが想定でき、『古今和歌集』の黎明期にその関連資料を存分に利用できるのは、やはり陽成院一門の和歌に対する熱意だけで

はなく、陽成院の特別な地位によるものであろう。

そして、習作的な特徴から、本歌合は陽成院一門の和歌の教育現場でもあると考える。陽成院の息子元良親王[19]は当時二十四歳で、恰も和歌の素養を培う時期に当たるので、本歌合のような習作的な歌合は元良親王らが和歌の教養を高めるための土壌となった。その後、元良親王や源清蔭などの陽成院の子孫が優秀な歌人に成長していき、彼らの秀作が『大和物語』や『元良親王集』によって伝わることで、陽成院の和歌に対する思いに応えたのであろう。

付記

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観CD-ROM Ver.2.0』（角川書店、二〇〇三年）による。「陽成院歌合（惜秋意）」の本文は、肥前島原松平文庫本を底本にし、適宜に漢字を当てて校訂したものである。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。

注

（1）萩谷朴『増補新訂　平安朝歌合大成　第一巻』（同朋舎出版、一九九五年）。二〇四～二〇八頁

（2）小沢正夫ほか『新編日本古典文学全集11　古今和歌集』（小学館、一九九四年）。

（3）藤岡忠美ほか『私家集注釈叢刊14　躬恒集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇三年）。

（4）平野由紀子ほか『私家集全釈叢書36　千里集全釈』（風間書房、二〇〇七）。

（5）松平文庫本・弘前図書館本：心の内まて。書陵部本：心の内まゝに歟。群書類従本・島根大本：心のまゝに。

（6）黄一丁『延喜十三年陽成院歌合』の惜秋歌について」、『和漢比較文学』第64号、二〇二〇年二月。一～一六頁。

（7）金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇』（培風社、一九四三年）。小野泰央「『朗詠』「三月尽」所収「留春不用関城固」について―橘在列小論―」、『中央大学国文』巻三九、一九九六年三月。

（8）『四部叢刊初篇』所収『白氏文集』。中國哲學書電子化計劃（https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=77504）による。

（9）北山円正「菅原氏と年中行事」『神女大国文』第十三号、二〇〇二年三月。一～十四頁。小野氏の論文は注（7）に同じ。

（10）川口久雄『日本古典文学大系72　菅家文草　菅家後集』（岩波書店、一九六六年）。

（11）大曾根章介ほか『新日本古典文学大系27　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年）。

（12）浙江大学図書館所蔵欽定四庫全書本『元氏長慶集』。中國哲學書電子化計劃（https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=5419）による。

（13）『武英殿二十四史』所収『隋書』。中國哲學書電子化計劃

（https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=77700）による。

（14）浙江大学図書館所蔵欽定四庫全書本『御定全唐詩』。中國哲學書電子化計劃（https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=6051）による。

（15）原文に従う。

（16）『古筆学大成　第21巻』（講談社、一九九二年）所収の影印の廿巻本の伝藤原忠家・俊忠筆柏木・二条切を翻刻して、適宜に校訂を加えたものである。

（17）『陽明叢書　国書篇　平安歌合集　上』（思文閣出版、一九七五年）所収の影印の十巻本を翻刻して、適宜に校訂を加えたものである。

（18）「陽成院一宮姫君歌合の本質：陽成院関係の歌合及び返歌合として」、『表現技術研究』第一七号、二〇二二年三月。一～一二頁。

（19）元良親王生没年：寛平二年（八九〇）～天慶六年（九四三）。

（こうごう、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期在学）

“Regrets about autumn,” Japanese poetry contest held by Yozei, the Retired Emperor: Impact of Earlier Poetry

Yuhao GU

Key Words: literature of Heian Era, poetry contest, Yozei the Retired Emperor, earlier poetry, expression intake

“Regret about autumn,” the Japanese poetry contest by Yozei, the Retired Emperor, was held in 913. This is the private poetry contest held by Yozei in which mainly his family and vassals participated. Expressions of poetry from the preceding period around *Kokin Wakashu* can be seen in this, which was probably the requirement for this poetry contest. This study will explain these characteristics by examining the nature of this poetry contest.